
戦争

グーフィ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

戦争

【ZPDF】

Z7840A

【作者名】

グーフィ

【あらすじ】

日常生活に飽きてしまったマイクが戦争に出発する。

前編（前書き）

一生懸命書きました。読んでくれればうれしいです。

やあ、初めまして。今日は僕の話を聞いてくれるために、このページを開いてくれた感謝します！

もし、この話がとてもなくつまらなかつたとしても、どうか最後まで聞いてくれたらうれしいです。・・・・・出来れば感想も・・・すみません、調子に乗つてしましました。（泣）

では僕が味わつた不思議な大冒険のお話を始めましょう。

いい忘れてたけど、僕の名前はマイク！…ビニでもいる普通の人間だ。ただ、少しだけこの退屈な人生に飽き飽きしているだけだ！それはそのはず、僕は、学校を卒業したあと小さな会社で働いていた。でも、全く楽しくともなんともない。毎日、上司に怒られてばかり、素敵な女性も見つからない（ありきたりなパターンだ！！！）だから、やめてしまった。いまは何にもしてない家で「口」口口しているだけ。（最近の言葉で言うなら）一ートかな・・・・・・・しかし、そんな退屈な毎日を送っている僕に、あるチャンスがまいこんできた。

もうすぐ僕のいる国で戦争があるらしい。僕は、心が踊った。やつた！…！…これで退屈な毎日とはおさらばだ！！…しかも、たくさんお金がもらえるぞ！！

そもそもここで、自分の命が危険にさらわれることが分かつていれば、あんな目にあわすにすんだのに・・・・・・・

早速僕は戦争に出る手続きを行つた、そして、手続きを済ませると。僕はすつ飛んで家に帰り、今後の僕の人生を考えに考えた。

「お金は何に使おうか……やつぱり車かな、それとも家でも建てようか……体つきも立派になるんだろうな……女子にモテモテだな。」

こんなことを考へてゐる間に、あつという間に戦争に行く日がやつてきた。

僕は、少ない荷物を持つて、戦争へと出発した！――

どうでしたか？・・・・・なんて聞いても面白くないでしょうね！そりゃあそうでしょう。普通（？）の男の（僕の）平凡な毎日を話しただけですから。

でも、まだ聞いてください。ここからは、今よりは面白くなるはずです。

少しだけ話はとびますが、戦争へ向かう途中の車の中、よりにもよつて、僕の乗つている車の中で、喧嘩が起つてしまつた。喧嘩のきっかけはささいなことだつた。

友達同士だと思われる、やせた男と太つた男が戦争について話し合つていた。でも、やせた男が戦争に対し急に弱気になつてしまつたのだ。もう太つた男がなだめようとしたけど、やせた男があまりにも弱音を吐きすぎるので、ついに太つた男がキレてしまい。やせた男に殴りかかつたのだ。

二人が大喧嘩をしているとき、とてもガツチリとした体格の人が喧嘩を止めようとしてふたりの間に割つて入つた。けれど、二人はそれに気付かずその男を殴つてしまつた。それをきっかけにして車の中の人たちが喧嘩に加わつていき、ついに車内で大乱闘が起つてしまつた。

もちろん僕も参加してところかまわずパンチした。パンチはさつきのガツチリとした男に当たつたが、僕のパンチは全く効かないらしい。次の瞬間僕はボコボコに殴られて、床でのびていた。

かを思い出した。
気付くと僕は暗いじりで寝そべっていた。僕は今まで何があった
はどうだ。
うーん。

「そうか……あの時殴られて気絶したんだ。」

僕は立ち上がり辺りを見回した。もう暗闇には目がなれたので、よく見える。周りには僕と同じでこの戦争で生き抜いて、お金をたくさんもらおうとしている人たちがたくさんいた。

強そうだ。

「はあ〜〜、ほんとに僕なんかがこんなに強そうな人たちと一緒に戦えるのかなあ・・・・・・」

僕は急に自分が迷惑にならうことになると気が気がしてくる。いえ、お腹も空いてきた。

僕は、別に何もすることがないので、しかたなくお腹をさすりながらまた横たわって眠りに就いた。

そして朝が来た。

早速僕は集合時間に遅刻してしまった。なぜかは分からぬけど、誰も僕を起こしてくれなかつたのだ。

僕は慌てて集合場所の飛行場にいつたんだ結果「一分も遅れてしまつ

た。そして、飛行場に着くなりいきなり怒鳴り声が聞こえた。

「おい！初日から遅刻してくるとはいひ度胸だな。戦場じゃあそんなどではないのこれんぞ！…しばらくの間やここで立つてろ……」

声の主は僕らの隊長だった。

僕は仕方なく隊長にしたがつて、みんなの後ろに立つと隊長が今日のことについて話始めた。

「今日の予定はお前達に作戦内容を教えることだ！一回しか言わないから良く聞くんだぞ。では教え…………お前も遅刻か！」

見ると僕と同じくらいの年の男が息を切らしてやってきた。

「いいか！…そんなことじやあ戦場では生きていけないぞ……しばらく立つてろ！…！」

「はい！すいません・・・

そして男は僕の横に立つた。

「俺の名前はアレック！よろしくな！…」

そう言ってアレックは手を差し出してきた。

「僕はマイクよろしくね！…」

僕も手を差し出し、アレックと握手をした。

「そこお！遅刻してきた分際でなにをやつてる」隊長は少し怒りながら使つたことがない。

「では、今回の作戦内容を改めて説明するが。俺達の隊は飛行機に乗り込みパラシュートで降り立つ！その後は…………途中から僕は話を聞いていなかつた。パラシュートなんて生まれてから使つたことがない。

隊長の話が終わると、隊長からパラシュートの使い方を教わった。隊長の説明はとてもわかりやすかつたので、僕は自信を持つことが出来た。

アレックはスカイダイビングをしたことがあるのか、手慣れた手続きで作業をこなしていった。

その後は、ほふく前進や銃の撃ち方を教わった。

隊長の教え方は、やつぱり分かりやすかつたので、あつといつ間に覚えることが出来た。

その夜、僕とアレックは明日のことについて話し合った。

「僕達、明日戦場に行くんだよねえ。」

「そうだよ。ああ、早く戦場で戦いたいよ。スカイダイビングもししたいしね！それで生き残つて大金を手に入れるんだー！」

とアレックは興奮しながら言つた。

「そうだね、生き残らないと。」

僕はちゃんと自分が生き残れるか心配だつた。もし、死んでしまつたらどうしよう・・・・・・やつぱり僕はこの戦争に参加するべきじゃないのかかもしれない・・・・

そんな事を考えていたら、僕はいつの間にか眠つてしまつた。

そして、恐怖の日々が始まつた。

朝早く、僕達はたたき起された。そして、あわただしく飛行場へと出発した。

飛行場に着くと、早速隊長が大声で言つた。

「いいか、お前らは今日から戦場に行く。あつちに行つても気を抜くな！！死にたくなかつたらなー！これから戦闘機に乗り込むぞ。それからのことは後から言う！」

そういうと隊長は戦闘機に乗り込んだ。

僕達も早足で戦闘機に乗り込み、戦場へと出発した。

僕はパラシュー^トをつけ、酸素マスクを首にかけて準備を整えた。周りの人も僕と同じで、緊張してピリピリしていた。でも、アレックだけは興奮を隠せない様子でわくわくしていた。

そして、たくさんの木々や川があふれかえっている場所で、また隊長の声が聞こえてきた。

「そろそろ、降りるぞ。準備しろ！。」

戦闘機のハッチが開いた。僕達はその周りに集まつた。緊張で心臓が飛び出しそうだ。

「よしー！準備できたなー俺がカウントするから一組ずつベイルアウトしろー！」

隊長がカウンタダウンし始めて、最初の組がベイルアウトした。次は一組目の僕たちの番だ。

「緊張すんなよ！絶対うまくいくって。」

僕があまりにも緊張していたので、アレックが励ましてくれた。

「カウントするぞ！」

僕は酸素マスクを着けた。

10・9・8・7・・・・・・3・2・1・・よし、いけえ！！！」

僕は、勢いよく戦闘機から飛び出した。そして、ものすごい速さで地面に向かって落ちていった。僕はジタバタと動かして、アレックのもとへ行つた。

アレックはとても楽しそうで、笑っていた。僕もそれを見ると緊張がほぐれていった。

そのあと、パラシユートが絡まつてないか心配しながら、僕達はパラシユートを開いた。・・・・・良かつた！絡まつていな

ない。

そして、地面に降り立つて、敵兵が周りにいないか安全確認した。僕の組は僕とアレックのほかに五人いる。名前は・・・・・忘れてしまつた。

安全確認が終わつたので、僕達は足跡がつかないように歩くことにした。（見つかつたら大変だ！！）

すぐ近くで何か音がした。僕達は銃を取り出して音のしたほうに向けた。それから少しの間沈黙が続いたけど、何も起こらなかつた。それからは、さつきよりもさらに慎重に行動した。

けれど、アレックだけは敵兵が来るのを楽しみにしていた。しばらく歩いていると、森の少し開けた所にきたので休憩をとることにした。

「なかなか敵兵がでてこないなあ。オレ戦うのを楽しみにしてたのに・・・・・・・・・・・・・・」

アレックは戦場にいるところに何の緊張感もなく話した。ので、

僕は関心した。

「アレックはここが怖くないの？」

「ああ、少しあは怖いよ。でもスリルがあつた方が面白いじゃないか！」

自分が死ぬかもしれないのにここが面白いなんてアレックはすごいなあ！僕はまたアレックに感心してしまった。

その時、ここから少しあなれたところで銃声がなつた。そして、銃声の後に叫び声や足音が聞こえてきた。

僕が警戒して誰かがこっちに来ていなかいか確認していると、アレックはもう待ちきれないという顔をして、僕達を置いて一人で走り去ってしまった。

僕達はアレックを止めようとしたけどアレックの足は恐ろしいほど速く、全く追いつくことが出来なかつた。

ついにアレックが戦場に到着してしまつた。僕達はその後を息を切らせながらやつとのことでアレックに追いついた。

アレックは手に銃を持つとものすごい速さで敵を撃つしていく。弾は見事に敵兵の頭や首などの急所に当たり僕達が戦いに加わる前にみんな倒してしまつていた。

僕は今起こつたことが信じられなかつた。

「今どうやつたの？」

僕は驚いて聞いた。

「狙つて撃つただけだよ。オレ昔からこういうことをよくやっていたんだよ。だからこのくらいのことは簡単に出来るよー。」

その後、僕達はまた休憩をとつた。

僕はまだ起こつたことが信じられなかつたけど、アレックのそばに

いれば僕は敵と戦わずにすむかもしれないし、もし戦つたとしてもアレックに任せて僕はあんまり敵と戦わなくてもいいかもしない。そうおもうと、アレックがとても頼りになるやつだと思えてきた。

次に日

僕は朝早くから起きて、いつ敵が攻めてきてもいいように周りを見回していたけど結局早起きした意味もなく敵兵は現れなかつた。その後、ほかの人を見張りを代わつてもらつて軽く食事をとつた。

「ねえ、今日はどうするの？」

僕はご飯をほおばりながらアレックに聞いた。

「さつき無線で聞いたんだけど今日は敵地に向かつて進むそうだ。大変な一日になりそうだから死んじや駄目だぞ。」

アレックはうれしそうに笑いながら言つた。

僕はまた緊張してきた。今度は昨日よりも危険なところに行くなんて・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「こんな戦争来なければよかつた。・・・・・・・・・・・・

「まあいいじゃないか。いざとなつたらオレが助けてやるよーーー！」

僕は不安なまま敵地に乗り込むことになつた。

僕たちは荷物をまとめて出発した。歩き始めてから三時間くらいたつただろうか。少しづつだけど辺りが騒がしくなつてきた。どうやら僕達の仲間がすでに敵兵と戦いを始めているらしい。

「早く行かないと戦いが終わっちゃうよー！」

アレックはまた僕達をおいて走り始めた。

僕はアレックに守つてもらおうと思いアレックについていった。アレックも僕が追つていることに気付いてスピードを落としてくれた。

僕はアレックと二人で敵兵に突つ込んで行つた。

僕はアレックのの後ろを走つて、アレックは周囲にいる敵を銃で倒していく。よし！このまま行けば大丈夫！！そう思つたとき、敵の流れ弾が僕の足に当たつてしまつた。

「うわ―――」

僕の足から血が吹き出していることにアレックが気付いて僕を抱きかかえてくれた。

「大丈夫か？ 弾に当たったんだな。早く治療しないと……こはひとまず退散しよう。」

僕は足の痛みに耐えながらアレックに肩を肩をかしてもらつて安全な場所を探した。

「よし！ あそこにしよう。」

アレックは指差した。差されたほうを見るに小さな洞窟があつた。僕とアレックは急いで洞窟に向かい、身を隠した。アレックは持つていた水筒の水を僕の足にかけた。

「痛いよアレック・・・・・」

僕はうめきながら言った。

「しょうがないだろ――このままじゃ出血多量で死んじまうぞ――！」

そういつて

そういう度は救急箱から針と糸をとりだしして僕の足を縫い始めた。これはとても痛かったけど僕は我慢して耐えた。その後包帯を巻いてやつと治療が終わつた。

するとアレックは立ち上がり外に敵がいるのを確認しながら言った。「お前はここに残つた方がいい。オレはまた戦つてくるからお前はそこで待つてろ。」

「わかった・・・・・・・」

僕も戦いたくなかったし、どの道この怪我じゃまともに戦えないのを素直にアレックの言つことを聞いた。

「じゃあ行つてくる。」

アレックはそう言つと足早に去つていつた。アレックならきっとここに戻つてくれるだろう。僕はしばらく痛みに耐えて痛みに慣れるのを待つた。

だんだん痛みに慣れてきたので洞窟の中を探検することにした。洞窟の床は滑つて何度も転びそうになつたけど少しづつ進んでいった。

すると洞窟の奥から何かが光っていることに気付いた。

なんだろう

僕はそれが気になつてしょうがなかつたので、見に行つてみると
にした。僕は足の痛みに耐えながらやつとのことで光までたどり着
いた。

その光を改めてみてみると光はまだ奥に続いているのが見えた。僕はその穴をのぞいてみると、穴のおくには一面の原っぱが広がっていた。

「すこい!! なーでしょんた?」

僕は穴に落ちてみて原^ハはに落ちてみた。落ちた時は足が痛んだけど、原っぱはどこまでも続いていてとても綺麗だったので僕はここが気に入ってしまった。

「うはいでもアレッケは僕がここにいることは気付いてくれるだろ
うと思いしばらくここにいることにした。僕はそこで食事をとり、
足が痛かったので横になつた。

あれ 僕

久松義重著

遠りばかり時ぐなていたけと暁ががた

僕は足が痛くないことに気付かはうとして自分の足を見てみると足は間然にではないけど、もうほんとんど治っていた。

「す、ぐ、い、一、泊、り、て、お、で、る。」

僕は試しに周りを歩いてみる

た。

穴にいてみると僕の二メートルくらい上で穴を見つけた。
僕は穴によじ登ろうとして壁に手をかけた。でも、岩がヌルヌルして
ていていて登ることが出来なかつた。だから仕方なくアレックを呼
んでみた

「おー——いアレツク——!こだよ!」

すると足音が聞こえてきて穴にアレックの顔が現れた。

「なんだ、そんなところにいたのか！心配して探してたんだぞ！－！」

の手につかまつた。そのとき、アレックと僕の重さでアレックがいた床が壊れた。

ドスン・・・・・・いつてえ～～」

アレックは落ちた時に打った場所をさすりながら立ち上がった。

「……………」

•
•
L

僕は不安になつた。

107

「そういえば、他の人たちはどうしたの？助けてもらおうよ！」

いや……………気付いたらみんなしなくてた　多分アレ達死んだと思われてるんじゃないかな。一

僕はがくくりして言った

「じゃあ僕達で出口を探すしかなしね」「早く行こよ! なるべく早くここから出たいし。

「そうだな。でも今日はやめとけ。もう暗にして今行動するのは危

「僕達は急いで、一飯を食べて寝よう。」

次の朝

僕達は朝早くから起きて出口を探して歩いた。

「……」は不思議なところだね。

卷之三

「一体ど」「ハナばいハんだよ。ずっと原っぱじやないか！」

アレックはいらいらしながら言った。

そのあとも歩いていると今度は川が見えてきたので僕達は川に沿つて歩いていくことにした。途中、銃を使って魚を捕つたり、川の水で体を洗つたりした。

それから先に進んでいくと鹿や鳥などの生き物も現れた。洞窟の中にどうして川や動物がいるんだろう・・・・・・そんな事を思つている時に、一頭うの飢えたライオンがいた。

僕達は万が一のために銃を取り出して警戒した。

予想どおり！ライオンはこっちに気付いて走つて来た。僕は銃を構えてライオンに向かつて撃つた。

弾は見事にライオンの眉間に直撃し、ライオンは動きを止め、そのまま倒れた。

「やるじゃないかマイク！ライオンをたしたぞ！！」

アレックが僕をほめてくれて、肩をたたいてくれた。

僕はうれしくて背後にライオンが迫つてきていることに気付かなかつた。そして、突然背後からもう一頭のライオンが僕に襲い掛かってきた。

「危ない！！」

アレックが僕を突き飛ばした。

「なにするんだよ。」

僕は押されたことにびっくりしてアレックを見た。そしてはもつとびっくりした。

なんとアレックがライオンに襲われているではないか。僕は急いでライオン向かつて銃を撃つた。

ライオンはその場に倒れこみ、アレックは苦痛で叫んでいた。

僕はアレックのもとに駆けつけた。

アレックは血まみれだつたけど、幸い急所は外れて腕を噛まれていた。

「アレック、大丈夫？」

僕はアレックのように治療できないので、とりあえず、消毒して包帯を巻いた。

アレックはまだ痛そうにしていたけど、少し痛みがやわらいだみたいで、僕に話しかけてくれた。

「手当してくれてありがとう……腕を腫まれちまつたよ。

……これじゃあ銃がうてないなあ……。

「じめん……僕のせいでこんなことになっちゃって……

……」

「いいよ。そんなことより今日はここで寝よう。今少しでも休みたいんだ。」

「わかった。」

僕は素直に従った。今のアレックは歩けるような状態じゃないので、今日はここで寝ることにした。僕はまたライオンが来ないか警戒して一睡も出来なかつた。

そして次の日、僕とアレックはいままでよりもっと大変な思いをすることになった。

前編（後書き）

どうでしたか？後編も書きますので、これが面白かったら読んでくれたらうれしいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7840a/>

戦争

2010年10月19日12時51分発行